

お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友だち関係 ソウル調査から

東京理科大学	竹尾和子
共愛学園前橋国際大学	呉宣児
国民大学	崔順子
中国政法大学	片成男
共愛学園前橋国際大学	山本登志哉
大阪教育大学	高橋登
立命館大学	サトウタツヤ
大真大学	金順子

How Children Build Parent-Child and Peer Relationship Through Using Pocket Money?: Results of the Children in Seoul

Tokyo University of Science	TAKEO, Kazuko
Maebashi Kyoai Gakuen College	OH, Seon-Ah
Kookmin University	CHOI, Soon-Ja
China University of Political Science and Law	PIAN, Chengnan
Maebashi Kyoai Gakuen College	YAMAMOTO, Toshiya
Osaka Kyoiku University	TAKAHASHI, Noboru
Ritsumeikan University	SATO, Tatsuya
Daejin University	KIM, Soon-Ja

本論文では、韓国ソウルの小学生、中学生、高校生に実施したお小遣いに関する質問紙調査のうち、お金のやりとりで見られる友だち関係と親子関係に関する調査結果について報告した。因子分析の結果、友だち関係尺度では、“おごり否定”“相互扶助”“貸し借り迷惑”“気軽な貸し借り”の4因子が抽出され、親子関係尺度では、“親の権限”と“親への融通”の2因子が抽出された。各因子得点の学校段階差を検討したところ、各因子得点において学校段階による違いが明らかにされた。これらの結果をもとに、お金をめぐる親への自立や依存、友だちとの関係性における発達過程について、彼らを取り巻く文化的特殊性と関連付けながら検討した。

【キー・ワード】お小遣い 親子関係 友だち関係 ソウル

Korean children (N = 750) from 5th grade elementary school, 2nd and 3rd grade junior high school and 2nd grade high school completed the questionnaire on parent-child and peer

relationship in relation to using pocket money. While the factor analysis for peer relationship revealed four factors, which were “Negation of treat[NT]”; “Mutual benefit[MB]”; “Lighthearted lending and borrowing [LLB]” and “Annoyance of lending and borrowing [ALB]”; the factor analysis for parent-child relationship revealed two factors, which were “Authority of parents [AuP]” and “Advance to parents [AdP]”. The results showed that each score of these factors differed between the groups. Based on the results, the developmental process of parent-child and peer relationship concerning usage of money was discussed as being related to particularity of the culture surrounding children living in Seoul.

【Key Words】Pocket money, Parent-child relationship, Peer relationship, Seoul

問 題

市場経済で中心的働きを持つお金は、モノやサービスの交換手段や価値基準として、また、その価値の蓄積や保存手段として、所有者と商品との文化的媒介機能を持つ。子どもたちは親から与えられたお金を使って市場経済に参入することで、お金の持つ社会経済的機能を理解し、自身の欲求を適切にコントロールしながら、お金を使用するスキルと社会的自我を獲得していく。その一方で、人がお金を手にし、それを使い、それをめぐって他者とやりとりをする様相は、その人が他者とのように繋がり、共同体の成員としてどのように位置づいているかという点と深く関連する。その意味で、お金は文化的成員間においても媒介機能を持つ。

子どもにとって重要な身近な他者として、親と友だちが挙げられる。親子関係に関しては、日中間の比較研究を行った片・山本(2001)によれば、日本では子どもが親からもらったお小遣いを自分のために使うことが一般的だが、中国の朝鮮族においては、子どもが自分のお小遣いで“学校の納付金を払う”とか“市場に買い物に行って食材を買う”など、親のためにお金を払う現象が存在する。つまり、日本では、“親から子へ”というお金の移動が一般的であるが、他の文化では、“子から親へ”という方向性も存在すると言えよう。このように、お金は親子関係の媒介的機能を持ち、その機能のあり方は各文化特有の親子関係の構図の中で、独自の様相を示す。本研究では、親子間を媒介するお金の働きにおける文化的多様性を捉えるための尺度として、“お金をめぐる親子関係尺度”(以後、“親子関係尺度”)を開発した。ここでは、“親は私から借りたお金を返さなくてもいい” “何かほしい物を買う時、自分のおこづかいで足りないとは私は親に足りない分を要求することができる”など、“親から子へ”と“子から親へ”といった双方向のやりとりが存在する可能性を考慮した項目を設定している。

一方、友だち関係については、友だち同士の“おごり”や“お金の貸し借り”といったお金のやりとりの捉え方は、日本、中国、韓国で顕著に異なることが明らかにされた(片, 2002; 山本, 1992; 山本・片, 1999; 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)。例えば、日本ではおごりに対して強い抵抗感が示されることが多いが、中国のととりわけ漢民族や朝鮮族、韓国では、おごりという行動が一般的で、むしろ望ましいこととされている。また、“お金の貸し借り”でも、日本では

否定的評価がなされる傾向があるが、韓国や中国では許容され、あるいは、望ましいとされることが多い。このように、お金が友だち関係をどのように媒介するかは文化により異なり、その媒介は各文化の友だち関係の構図の中で、各文化特有のあり様をなす。このようなお金の友だち関係における媒介のあり方とその文化的多様性を検討するために、我々は“お金をめぐる友だち関係尺度”(以後、“友だち関係尺度”)を作成した。そこでは“友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない”“友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい”“友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあたりまえである”など、お金の友だち同士の分配のあり方に関する信念を問う項目を13項目設定した。この項目の設定では、これまでの先行研究(片, 2002; 山本, 1992; 山本・片, 1999; 2000; 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)で明らかにされてきたお金をめぐる友だち関係における重要な視点として、“平等”“両義性”の視点を取り入れた。この二つの視点について以下に述べる。

先述したように、おごりに対して日本では否定的評価がなされるのに対し、中国の漢民族や朝鮮族および韓国では肯定的評価がなされることがすでに指摘されている(片, 2002; 山本, 1992; 山本・片, 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)。これらの先行研究では、それぞれの評価の背後に平等の意識が関与しているのではないかと考察されている。具体的には、日本人がおごりを“いけないこと”と捉える背景には、おごと友だち同士の平等性が損なわれると認識していることが考えられる。一方、中国の漢民族や朝鮮族および韓国では、おごりはするが、そこで守られている“おごったらおごり返す”という原則は、友だち同士の平等性を維持するための原則であると考えられる。

また、これまでの先行研究(山本・片, 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)から推測される所では、友だち同士のお金のやりとりには、借りる側か貸す側か、おごる側かおごられる側かといった、立場の違いによってその意味が異なることが考えられる。例えば、お金を借りたり、おごってもらったりする側にとっては、お金のやりとりは“迷惑をかけること”という意味を持ち、貸す側やおごる側にとっては“相手を助けてあげること”という意味を持つ可能性があり、このような両義性の綱引き関係の中で、お金のやりとりが展開されることが考えられる。また、このような両義性の綱引き関係のあり方が文化的に多様であることが予想される。例えば、これまでのいくつかの先行研究(山本・片, 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)から推測すれば、日本では“迷惑をかける”という意識が強く、その結果として、“おごり”や“お金の貸し借り”が抑制される傾向が高いが、中国や韓国では、“助けてあげる”という意識が、貸す側、おごる側だけではなく、借りる側、おごられる側にも共有され、“おごり”や“お金の貸し借り”が促進される傾向が高くなると考えられる。

以上の考えに基づき作成された親子関係尺度、友だち関係尺度を、既に大阪の小学生、中学生、高校生を対象に実施した。この調査で得られたデータを基に、各尺度の項目群を対象に因子分析を行った結果、親子関係尺度では、“親の権限”と“親への融通”の2因子が抽出され、友だち関係尺度では、“自己責任”と“相互扶助”の2因子が抽出された。これらの各因子への収束は、日本人の親子関係あるいは友だち関係に関する信念を反映する可能性が高く、他の文化では他の信念を反映する因

子への収束が予想される。そこで、本論文では、同尺度をソウルの小学生、中学生、高校生を対象に実施し、そのデータをもとに抽出された因子を検討し、ソウルの子どもたちが持つお金をめぐる親子関係、友だち関係に関する信念について理解したい。

更に、本論文では、親子関係尺度、友だち関係尺度へのソウルの子どもたちの反応における発達差（小学生、中学生、高校生間の学校段階差）を検討する。大阪調査のデータをもとに、その学校段階差を検討したところ、友だち関係尺度では、学校段階の上昇に伴い、親の価値観から離れ、友だち同士で共有される価値観へと移行することが示された。また、親子関係尺度では、中学生は小学生や高校生に比べて、親の権威と子どもの従属といった位置関係を背景とするお小遣いのやり取りに対して拒否的になり、自己の能動性に基づくお小遣い使用への欲求が萌芽しつつあることが示された。これらの結果は、まさに彼らの自立過程を反映していると言えよう。そしてその自立過程は、まさに、親の価値観や友達同士で共有される価値観を取り込みながら生じる、文化化の過程でもある。つまり、お小遣いは親子関係、友だち関係における媒介物であるだけでなく、文化的価値観とそれに取り囲まれて育つ子どもの間を媒介し、子どもの発達や文化化を触発するという機能をも有する。本研究では、日本とは異なる文化を生きるソウルの子どもたちを対象に、親子関係、友だち関係といった二者関係におけるお小遣いの媒介的機能のあり方に加えて、ソウル特有の文化的価値観と子どもの発達における媒介的機能のお小遣いのあり方について理解したい。

最後に、ソウルの子どもたちを調査対象に選んだ理由について述べる。比較文化的研究では、現在“集団主義 V S 個人主義” (Triandis, 1995) や “相互依存的自己観 V S 相互独立的自己観” (Markus & Kitayama, 1991) という文化二分法的発想に基づき、“西洋 V S アジア(あるいは非西洋)” の対比軸に等置させる研究が有力である。だが中根(1967)らの古典的分析や、近くは東の指摘(2000)にも見られるように、アジア地域はむしろ欧州地域を超える多様性が特徴である。その中でも東アジア地域は儒教的文化という共通性が強調されてきたが、これまでの先行研究(山本・片, 2001; 山本他, 2002a; 山本他, 2002b; 山本他, 2003)でも明らかな日中韓の文化差は上記二分法の有効性に疑問を投げかける。韓国は地理的に日本とはもっとも近接しており、それゆえに、歴史的にも、日本と韓国は相互に強く影響しあってきた。また、ソウルはこれまで我々が調査を実施した大阪と同様、経済的に高度に発達した地域である。このように大阪とさまざまな意味で緊密性と共通性を持つソウルにおける文化的特殊性を析出することは、上記の文化二分法を超えた新たな文化理解の手がかりを探る一歩として、重要であろう。

方 法

調査対象者 韓国ソウルの公立小学5年生231名(男子119名,女子107名,不明5名), 韓国ソウルの公立中学2,3年生256名(男子131人,女子123人,不明2人), 韓国ソウルの公立高校2年生263名(男子136名,女子126名,不明1名)。調査対象となった小学校はソウルの江北のやや東に位置し、昔からの住宅地に隣接し、その住宅地に住む子どもたちが通っている。彼らの家庭の社会経済レベルは中程度である。中学生の調査は、二校で実施し、そのうち一つは、ソウルの江北のやや北に位置し、

市場と国立公園に指定されている山が隣接する。社会経済的に中程度の家庭の子どもが多く通っている。もう一つの中学は高校の付属校であり、この高校でも調査を実施した。中高一貫教育であるこの学校は、ソウルの江北のやや北に位置し、国立公園に指定された山に隣接する。社会経済的に中程度の家庭の子どもが多く通っているが、上位の家庭の子どもも少数通っている。

調査方法 質問紙調査を実施した。調査は授業内に集団式で行い、無記名式で回収した。

質問紙 質問紙は質問紙1と質問紙2の二つのタイプが用意された。質問紙1と質問紙2に共通して設けられている設問事項は、主に“子どものお金収入の実際”“お金をめぐる友だち関係尺度(友だち関係尺度)”“お金をめぐる親子関係尺度(親子関係尺度)”“今一番書きたいものと、お金で買えないもの”“年齢・性別・家族構成・親の職業など”であった。質問紙1のみで設けられている設問事項は、“購買活動における出資者”であり、質問紙2のみで設けられている設問事項は、“お小遣い使用における規範意識(善悪・許容度に関する意識)”であった。これらの質問事項は中国朝鮮族を対象とした調査(山本・片, 1999; 2001)で作成され用いられた質問紙を元に、韓国済州島及びソウル市におけるインタビューや観察調査(山本・片, 2001; 片・山本, 2001; 山本他, 2002a; 2002b; 2003)を踏まえ、日中韓の研究チームで討議をして作成したものである。本研究では、質問紙1, 2に共通して設けた“友だち関係尺度”“親子関係尺度”を扱う。

調査時期 2003年6月25日から7月18日

結 果

分析1 お金をめぐる友だち関係尺度

項目レベルの反応 項目に対する反応について友だち関係尺度の個々の項目に対して、対象者がいかなる反応をしているかを分析した(Figure1)。Figure1は友だち関係のお金のやりとりに関する各項目において、“まったく反対”を1点、“まったく賛成”を5点として得点化して、学校段階別に平均肯定度(項目得点の平均値)を求め、小学生で肯定度の高い順に配列したものである。尚、番号～は質問紙における項目の提示順である。

Figure1に見るように、全体として中高生の反応は類似している。全体に小学生は中学生に比べて反応の幅が狭く、緩やかな傾斜が認められ、肯定度の平均値は2.2~3.9の間に分布し、しかもどちらともいえない(2.5~3.5)の範囲に収まる項目が13項目中8項目もある。これに対して中学生ではそれぞれ平均値が1.8~4.1, 1.7~4.2で、どちらともいえない範囲に収まる項目ものみであり、判断がより明確化している様子がうかがわれる。

更に、小学生から、中学生、高校生への変化の内容を見ると次のようになる。尚、この変化および後で述べる性差について客観的に捉えるための指標を得るために、性別と学校段階差を独立変数とし、各項目得点を従属変数としたに二要因の分散分析を行った。小学生が他より低い肯定度を示す項目としては、“友だちから借りたお金は、たとえ、小額でもきちんと返さなければいけない(返済確実に)”($F(2, 742) = 4.46, p < .05, 小 < 高$ [多重比較の有意性はいずれも有意水準5%で検定])、

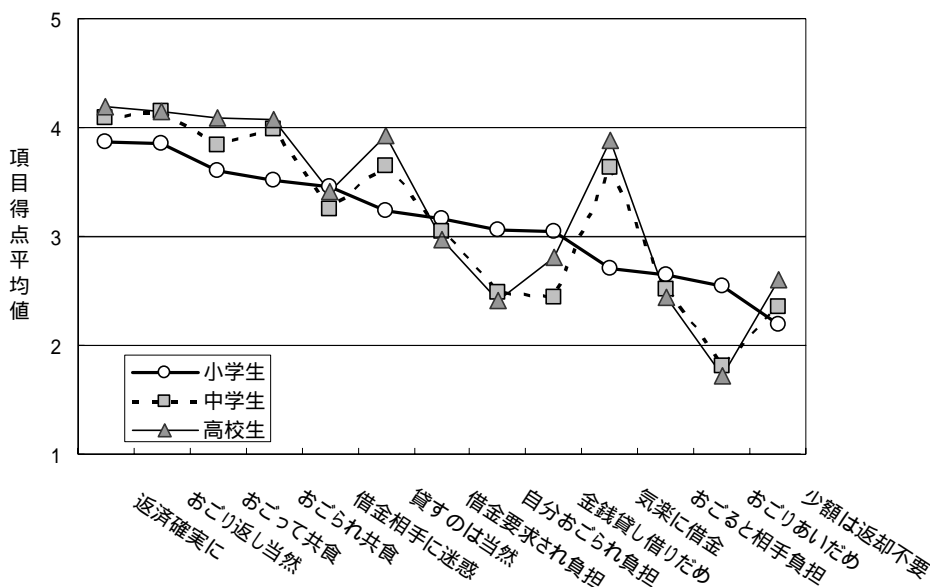


Figure1 友だち関係尺度: 各項目の平均値(学校段階別)

友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあたりまえである(おごり返し当然)”(F(2, 740) = 7.12, p<.001, 小<中・高), “ 友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい(おごって共食)”(F(2, 738) = 10.43, p<.001, 小<高), “ もし友だちが私にお菓子などを買ってくれれば、私は遠慮するより一緒に楽しく食べることにする(おごられ共食)”(F(2, 740) = 19.20, p<.001, 小<中・高), “ 友だちがお金で困っているなら、私は迷わず貸してあげることができる(貸すのは当然)”(F(2, 737) = 23.35, p<.001, 小<中・高), “ 私は友だちと一緒に買い物に行き、お金が足りなくなったとき、友だちから気軽にお金を借りることが出来る(気軽に借金)”(F(2, 741) = 78.11, p<.001, 小<中・高), “ 友だちが私から借りたお金が小額なら、友だちはそれを私に返さなくてもいいと思う(小額は返却不要)”(F(2, 742) = 6.51, p<.01, 小<高)が挙げられる。一方、小学生が他より高い肯定度を示す項目として、“ 友だちの間でおごったりおごられたりするのはい(おごりあいだめ)”(F(2, 740) = 42.34, p<.001, 小>中・高), “ 私は友だちからおごってもらおうと負担に思う(自分おごられ負担)”(F(2, 742) = 20.50, p<.001, 小>中・高)が挙げられる。また、“ 友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない(金銭貸し借りため)”(F(2, 739) = 13.71, 小・高>中)については、中学生で得点が低いという他の項目の学校段階差とは異なる差異が見られた。以上を踏まえると、借りたお金は返すべきという意識がやや強まり(), 金銭の貸し借りに寛容になり(), おごられることへの負担感が減少し(), おごり返しはより当然視し(), おごり合いを肯定し(), おごられて食べることに遠慮を感じず(), おごって食べることに楽しさを感じ(), 困っている友だちには迷わずお金を貸し(), 友だちから気楽にお金を借りる(), といった風にならずともお金を介して友人関係を結ぶことに対して、その肯定度が高まる方向に変化しており、その逆のケースは全く存在しない。“ おごりあいだめ” という の項目について、その肯定度が全項目中で

Table1 “お小遣いをめぐる友だち関係”尺度 因子分析結果(主因子法、バリマックス回転)

項目	因子			
	おごり 否定	相互扶助	貸し借り 迷惑	気軽な 貸し借り
8.私は友だちからおごってもらいと負担に思う。	0.62	0.04	0.21	0.00
6.友だちの間でおごったりおごられたりするのはよくない。	0.49	-0.16	0.23	-0.19
4.私が友だちにおごと、その友だちは負担に思うだろう。	0.46	0.13	0.13	0.13
9.もし友だちが私にお菓子などを買ってくれれば、私は遠慮するより一緒に楽しく食べることにする。	-0.45	0.20	0.18	0.26
3.友だちからおごってもらったら、次に私がおごるのがあたりまえである。	0.03	0.56	-0.04	0.02
10.友だちにお菓子などを買ってあげるのは、一人で食べるより楽しい。	-0.11	0.50	0.00	0.20
5.友だちがお金で困っているなら、私は迷わず貸してあげることができる。	-0.03	0.49	-0.26	0.37
2.友だちから借りたお金は、たとえ、小額でもきちんと返さなければいけない。	0.04	0.44	0.15	-0.21
11.私は、友だちからお金を貸して欲しいといわれると負担を感じる。	0.13	-0.12	0.68	-0.18
12.友だちからお金を借りることは、たとえ、小額でも相手に迷惑をかけることになる。	0.20	0.13	0.43	-0.10
7.友だちの間でお金の貸し借りをするのはよくない。	0.28	-0.07	0.30	-0.29
13.友だちが私から借りたお金が小額なら、友だちはそれを私に返さなくてもいいと思う。	0.05	-0.02	-0.14	0.47
1.私は友だちと一緒に買い物に行き、お金が足りなくなったとき、友だちから気軽にお金を借りることが出来る。	-0.28	0.23	-0.11	0.37
因子寄与	1.264	1.148	1.004	.824
因子寄与率	9.72%	8.83%	7.73%	6.34%
累積寄与率	9.72%	18.56%	26.28%	32.62%

一番低くなることも注目すべき点であろう。

なお、性別の主効果は (P<.001), (P<.001), (P<.05)のみに見られた。女子が借りたお金は確実に返さなければならぬ()とか、おごり返しは当然()とより強く考えるなど、男子より律儀な傾向が見られ、他方、友だちに借金を頼まれたら貸してあげる()ことにやや積極的であるなど、全体として相手をより気遣う傾向も多少感じられる。

因子分析結果と因子得点の発達差 友だち関係尺度の13項目については、“まったく反対”を1点、“まったく賛成”を5点として得点化した。これらの得点をもとに、それぞれについて因子分析を実施した(主因子法、バリマックス回転)。スクリープロットと解釈可能性から、4因子解を採用した。バリマックス回転後の因子分析結果をTable 1に示す。因子負荷量の高い項目の内容から、第1因子は“おごり否定”、第2因子は“相互扶助”、第3因子は“貸し借り迷惑”、第4因子は“気軽な貸し借り”と命名した。“おごり否定”は、友だち同士の“おごり・おごられ”に対する否定的評価を示し、“相互扶助”は友だち同士の“おごり・おごられ”やお金の貸し借りは双方にした方がいいとい

Table2 “お小遣いをめぐる友だち関係”尺度 因子得点の差の検定

		平均値(標準偏差)	分散分析結果	多重比較
おごり否定	小学生	0.38 (0.77)	F(2, 713) = 39.87, p < .01	小 > 中・高 p < .05
	中学生	-0.16 (0.78)		
	高校生	-0.17 (0.70)		
相互扶助	小学生	-0.31 (0.87)	F(2, 713) = 28.20, p < .01	小 < 中・高 p < .05
	中学生	0.06 (0.78)		
	高校生	0.20 (0.59)		
貸し借り迷惑	小学生	0.06 (0.86)	n.s.	
	中学生	-0.04 (0.77)		
	高校生	0.02 (0.66)		
気軽な貸し借り	小学生	-0.27 (0.74)	F(2, 713) = 28.46, p < .01	小 < 中・高 p < .05
	中学生	0.06 (0.62)		
	高校生	0.17 (0.59)		

う意識を示し、“貸し借り迷惑”は友だち同士のお金の貸し借りにおける迷惑意識を示し、“気軽な貸し借り”は小額程度なら気軽にお金の貸し借りができるという意識を示す。

それぞれの因子得点の学校段階差を検討するために、各因子得点の小学生、中学生、高校生の差の検定を行った(一要因の分散分析)。各学年の平均、分散分析の結果、およびTukey法による多重比較の結果をTable 2に示す。Table 2から、“貸し借り迷惑”以外の因子得点については学年差が見られた。ただし、その傾向は因子によって異なり、“おごり否定”因子では学年の上昇とともに点数が低くなる傾向があり、“相互扶助”、“気軽な貸し借り”因子では点数が上昇していた。

分析2 親子関係尺度

項目レベルの反応 親子関係尺度の個々の項目に対して、対象者がいかなる反応をしているかを分析した(Figure2)。Figure2は親子のお金のやりとりに関する各項目において、“まったく反対”を1点、“まったく賛成”を5点として得点化して、学校段階別に平均肯定度(項目得点の平均値)を求め、小学生で肯定度の高い順に配列したものである。

Figure2に見るように、全体として、肯定度が4を越すものは無かったが、“親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない(親の借金よくない)”だけが、肯定度が2を下回り、親が子どもに借金することには抵抗が無いと考えていることが明らかである。他の6項目の全体については尺度の平均値(=3)の周辺であることから、これらの項目に対しては、積極的に肯定するわけでも、否定するわけでもないという態度が読み取られる。

また、小学生、中学生、高校生間の違いに注目したところ、中高生の反応が類似していることが分かる。小学生では、“親の借金よくない”を除く6項目において、肯定度が3.3~3.5の範囲に収まるが、中高生になると肯定度がばらつき始め、判断がより明確化していると言えよう。

更に、項目ごとに小学生、中学生、高校生の違いを見ると次のようになる。尚、この変化および後で述べる精査について客観的に捉えるための指標を得るために、性別と学校段階差を独立変数とし、各項目得点を従属変数とした二要因の分散分析を行った。小学生が他より高い肯定を示した項目としては、“親は私から借りたお金を返さなくてもいい(借金返済不要)”(F(2, 742) = 20.5, p < .01, 小 > 中・高[多重比較の有意性はいずれも有意水準5%で検定])、“もし私に臨時にたくさんのお金ができ

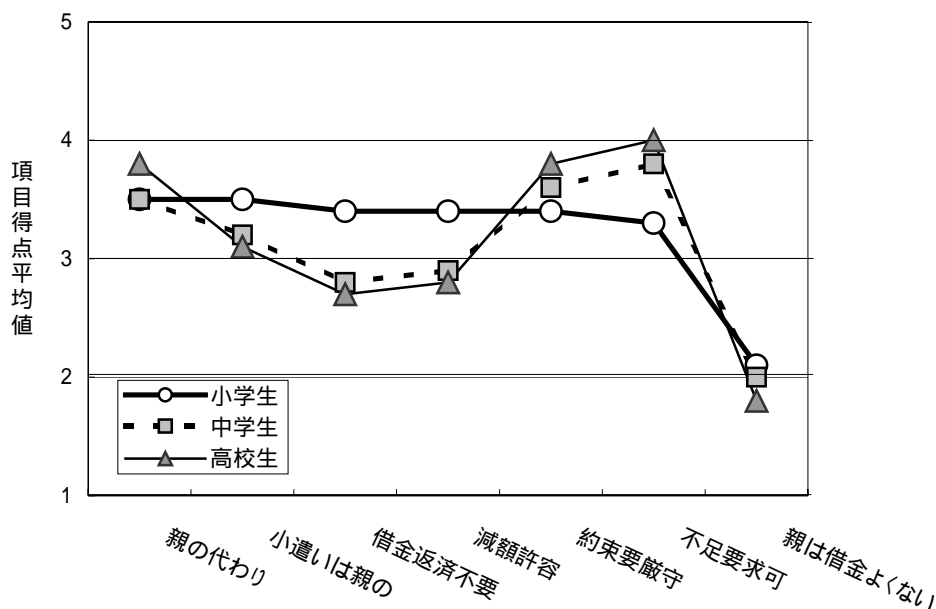


Figure2 親子関係尺度:各項目の平均値(学校段階別)

たら、その月のおこづかいを減らされてもいい(減額許容)”(F(2, 742) = 14.1, 小>中・高), “おこづかいをくれたのは親なので、おこづかいは私のお金ではなく親のお金である(小遣いは親の)”(F(2, 742) = 7.8, 小>中・高), “親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない(親の借金よくない)”(F(2, 742) = 6.2, 小>高)が挙げられた。一方、小学生が他より低い肯定を示した項目としては、“親の代わりに、私が自分のおづかいで細かいお金などを払うのはいいことである(親の代わり)”(F(2, 742) = 6.1, 小・中<高), “親が私におこづかいをくれることを約束したら、どんなことがあってもその約束は守るべきである(約束要厳守)”(F(2, 742) = 6.0, 小<高), “何かほしい物を買う時、自分のおづかいで足りないとは私は親に足りない分を要求することができる(不足要求可)”(F(2, 742) = 26.3, 小<中<高)が挙げられた。小学生においては、親が自分への借金返済が不要だとしたり(), 小遣いは親の金であるとしたり(), 自分の側の条件の変化によってお小遣いが減額されることも容認する()などへの肯定が高かった。その一方で小学生は親が約束を遵守()しなくていいとし、自分の小遣いが足りない場合でも要求はしない()としがちであった。以上のように、小学生においては、金銭の執着が低く、子から親へのお金の流動を容認する傾向が高く、その傾向が学校段階の上昇に伴い減少する点が明らかにされた。なお、性別の主効果は (P<.01) に見られた。女子の方が、何かほしい物を買う時、自分のおづかいで足りないとは親に足りない分を要求するとしており、女子における親子関係の親密性が示唆された。

因子分析結果と因子得点の発達差 親子関係尺度の7項目については、“まったく反対”を1点、“まったく賛成”を5点として得点化した。これらの得点をもとに、それぞれについて因子分析を実施した(主因子法, バリマックス回転)。スクリープロットと解釈可能性から2因子解を採用した。パ

Table3 “お小遣いをめぐる親子関係”尺度 因子分析結果(主因子法、バリマックス回転)

項目	因子	
	親の権限	親への融通
親は私から借りたお金を返さなくてもいい。	0.64	0.18
もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のおこづかいを減らされてもいい。	0.61	0.11
おこづかいをくれたのは親なので、おこづかいは私のお金ではなく親のお金である。	0.46	0.15
親が私におこづかいをくれることを約束したら、どんなことがあってもその約束は守るべきである	-0.46	0.24
親のかわりに、私が自分のおこづかいで細かいおかいお金などを払うのはいいことである。	0.17	0.44
親が細かいお金がないからといって私からお金を借りるのはよくない。	-0.14	-0.36
何かほしい物を買う時、自分のおこづかいで足りない私は親に足りない分を要求することができる	-0.04	0.24
因子寄与	1.240	1.000
因子寄与率	13.10%	8.93%
累積寄与率	13.10%	22.03%

リマックス回転後の因子分析結果を Table3 に示す。因子負荷量の高い項目の内容から、第 1 因子は“親の権限”，第 2 因子は“親への融通”と命名した。“親の権限”はお金のもらい方が親の権限で調節されることを示す因子，“親への融通”は親子の間でお金を融通し合うことを示す因子と考えられる。

それぞれの因子得点の学校段階差を検討するために、各因子得点の小学生、中学生、高校生の差の検定を行った(一要因の分散分析)。各学年の平均、分散分析の結果、および Tukey 法による多重比較の結果を Table4 に示す。Table4 から、“親の権限”においては、小学生が中学生より点数が有意に高く、“親への融通”は高校生が小中学生より有意に高かった。

Table4 “お小遣いをめぐる親子関係”尺度 因子得点の差の検定

		平均値(標準偏差)	分散分析結果	多重比較
親の権限	小学生	0.31(0.82)	F(2,720)=25.13, p<.01	小 > 中・高 p < .05
	中学生	-0.09(0.77)		
	高校生	-0.17(0.74)		
親への融通	小学生	-0.11(0.71)	F(2,720)=9.22, p<.01	高 > 小・中 p < .05
	中学生	-0.03(0.55)		
	高校生	0.12(0.55)		

考 察

項目レベルの分析結果について 項目レベルの分析結果では、項目全体に対する反応パターンにおいて、友だち関係尺度、親子関係尺度いずれでも、小学生と中学生の間で反応に目立った違いがあり、中学生は類似しているという傾向が見られた。このようなパターンの年齢変化は、最初に成立する子ども的な反応からの離脱過程、ないしは親の影響圏からの相対的な自立の過程を示していると解釈できるが、この点から見たとき、中学生の反応が小学生のパターンを維持し、高校生になって大きく変化する大阪のデータ（竹尾他、2004）と比べて興味深い。すなわち、ソウルでは大阪よりも早く、小学生から中学生に移行する時期に、この点で大きな精神的変化が一挙に進行する可能性がそこには示されているからである。

これを自立過程として見たときに、友だち関係尺度、親子関係尺度いずれにおいても、全体に小学生は中学生に比べて反応の幅が狭く、緩やかな傾斜が認められた点も興味深い。それが中学生になると、反応の幅が広がり、判断がより明確化している様子がうかがわれる。この点、日本の小学生ですでに平均値が比較的広く分布しており（竹尾他、2004）、項目間の差について構造が比較的明確であることは質的な違いを見せる。すなわち、大阪の場合、小学生ですでにかなり明確化したパターンが中学で継続し、高校で大きく変化するのに対し、ソウルの事例では小学生の時期にはまだ比較的曖昧な中性的態度が強いのが、中学生になって急速に明確なパターンを獲得し、それが高校で受け継がれるという印象を受けるデータとなっている。この点も両地域における自立パターンの差異を考えると興味深いデータであろう。

因子分析結果について ソウルの調査では、親子関係尺度では、“親の権限”と“親への融通”の2因子が抽出され、これは大阪調査の結果とほぼ一致した結果であった。因子得点の学校段階差については、大阪調査では、“親への融通”の得点が中学生において小学生や高校生より有意に低く、“親の権限”は、中学生において小学生や高校生より有意に低い傾向が見られた。この時期の大阪の子どもが、親の権威と子どもの従属といった位置関係を背景とするお小遣いのやり取りに対して拒否的になり、自己の能動性に基づくお小遣い使用への欲求が萌芽しつつあることが示された。一方、ソウルではこのような中学生の特殊性は見られず、“親の権限”が小学生から中学生にかけて減少し“親への融通”は中学生から高校生にかけて上昇するという結果が得られた。“親の権限”は“親は私から借りたお金を返さなくてもいい”“もし私に臨時にたくさんのお金ができたら、その月のおこづかいを減らされてもいい”など、親の権威に“従属する”という意味が強く含まれる。対して、“親への融通”は“親のかわりに、私が自分のおこづかいで細かいお金などを払うのはいいことである”など、親に対して“自発的に貢献する”という意味が強く含まれる。ソウルの結果は、学校段階の上昇に伴い、親子間のお金のやりとりが、“従属的”なものから“自発的・自律的”なものへと変化することを示す。小学生の段階では、必要に応じてその都度お金をもらうことが多く、親と独立にお金を使う機会が少ない分、お小遣いは“自分のお金”という意識が薄く、親のやり方をそのまま従属的に受け入れている状況が多いことが考えられる。高校生になると、“自発的・自律的”な親子間のお金のやりとりが上昇し、彼らがお小遣いを“自分のお金”と捉えるようになり、自分の意志で比較

的自由に親の状況を考慮しながら、お金のやりとりをするようになると言えよう。

友だち関係尺度では、“おごり否定”“相互扶助”“貸し借り迷惑”“気軽な貸し借り”の4因子が抽出された。大阪調査では、“自己責任”“相互扶助”の2因子が抽出されたことと比較して考えると、ソウルの子どもたちは、友だち同士のお金のやりとり（おごりやお金の貸し借り）に対して、より分化した認識をしていると考えられる。この背景には、日本、韓国のそれぞれにおける、友だち同士のおごりあいや金銭の貸し借りの捉え方の違いが関与している可能性がある。日本では、友だち同士のおごりあいや金銭の貸し借りに対して否定的な評価がなされる点は先に述べたとおりである。時に、それは、子ども同士のトラブルの元と捉えられ、“お金は学校に持っていかない”“下校中の買い食いはしてはいけない”など、家庭でも、学校でも、お金の使い方に関する細かい指導が日常的になされている（陰山, 2003）。対して、韓国では、友だち同士のおごり合いや金銭の貸し借りに対して、肯定的な評価を下す傾向があることが、山本他（2003）、Oh et al. (2005)のインタビュー調査により、明らかにされている。これらの研究によれば、あまりに頻繁すぎるおごりや高額なおごりでなければ、一般的に、友だち同士のおごりあいは普通にあるものとして捉えられ、お金の貸し借りでも、それが“友だちを助ける”ことにつながるような文脈では、必ずしも否定的に捉えられるものではない。このような文化的文脈が、彼らのおごりやお金の貸し借りに対するより分化した複雑な認識のあり方と関連していると考えられる。

更に、本研究では、このような韓国における友だち同士のおごりやお金の貸し借りへの肯定的評価には、学年により変化することが示された。とりわけ、小学生から中学生への移行段階で大きく変化することが明らかにされた。より具体的には、項目レベルの結果（Figure1）から判断して、“おごり否定”“相互扶助”“気軽な貸し借り”において、小学生では“3”前後の“どちらともいえない”という評価をするのに対し、“おごり否定”では、中学生において“反対”へと変化し、“相互扶助”“気軽な貸し借り”では、中学生において、“賛成”へと変化すると考えられる。つまり、小学生では、“おごり・おごられ”や少額の金銭の貸し借りに対して、明確な意見を持っていなかったのが、中学生になって、おごりに対する肯定的評価が明確化することになる。この過程は、友だち同士のおごりやお金の貸し借りを“よし”とする文化への“文化化”の過程として捉えることが出来るが、その変化が小学生から中学生に移行する段階で顕著に現われるという点については、何らかの特殊な理由が関与している可能性が考えられる。

その可能性の一つとしては、小学生は親とは独立におごり合いやお金の貸し借りをする状況に置かれること自体が少ないという点が考えられる。山本他（2003）、Oh et al. (2005)のインタビュー調査では、小学校の時からすでにおごり合いを経験しているケースが多いとされるが、それは、小学生のおごりの場合は親が介入する状態でのおごりが多い。よって、おごる行為はしながらも、それが無自覚的になされている可能性があり、小学生の友だち同士のおごりや金銭の貸し借りに対する、あいまいな評価につながるのかもしれない。それが、中学生になることで、親と離れて、あるいは、友だちとの関係の中でお金を使う機会が増え、それをきっかけに、親から独立して、自分たちの現実の経験の中で、自身の裁量によりお金を使用することになる。このことが、友だち同士のお金のやりとりに関する明確な価値判断を獲得するようになるのかもしれない。

また、韓国では中学生から行動圏が質的に変化するという事実が関連している可能性がある。日本では、中学校区は二、三の小学校区が合わさって成立し、学校までの道のりは、徒歩かせいぜい自転車通学が一般的である。親の目から見ても“自分の目の届く生活域内”に子どもが通っている状況と言えよう。対して、韓国では、中学校区は八つほどの小学校区が合わさって成立しており、子どもの多くがバス通学をするようになる。つまり、親の目から見ても“自分の目の届かない世界”に子どもが通う状況が中学生において成立するということになる。このことが、韓国における小学生から中学生にかけての目立った背景となっている可能性がある。

更に、小学生と中学生との間に明確な違いが見られたものの、中学生と高校生との間ではそれほど目立った違いがなかった点については、次のような可能性が考えられる。日本では中学生から高校生にかけて親子関係や友だち関係において目立った違いが見られたが、その背景の一つとして、彼らの多くが高校生になるとアルバイトを始め、自力で自分のお金を入手する術を得ることが挙げられる。対して、韓国では、高校生がアルバイトをすることは日本ほど一般的ではない。たとえアルバイトをしたとしても、ほとんどは親や親戚などの手伝いであって、もともと小遣いに当てられる分や教育費に当てられる分をアルバイトで補うというケースが多く、高校生が親とは全く独立的にアルバイトをする例は少ない。そのことが中学生と高校生の間で目立った質的な違いが見られなかったことと関連している可能性がある。

ソウルの調査では、親子関係尺度、友だち関係尺度のいずれにおいても、小学生から中学生にかけての目立った変化が特徴的であった。また、ソウルの子どものたちのお小遣いをめぐる親子関係や友だち関係のあり方は、大阪調査のそれとは質的に異なる点が多く存在した。これらの背景については、質問紙調査の他の結果、および、インタビューや観察などによって得られたデータとの関連性を明らかにしながら今後更なる検討が必要であろう。

引用文献

- 東洋 1994 シリーズ人間の発達 12 日本人のしつけと教育 発達の日米比較に基づいて一 東京大学出版会
- 陰山英男 2003 学力は家庭で伸びる 今すぐ親ができること 41 小学館
- Markus,H.R. & Kitayama,S. 1991 Culture and the self : Implications of cognition,emotion,and motivation. *Psychological Review*,98,224-253.
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 単一社会の理論 講談社現代新書
- Oh, S., Pian,C., Yamamoto,Y., Takahashi,N., Sato,T., Takeo,T., Choi,S. and Kim,S. 2005 Money and the Life World of Children in Korea; Examining the Phenomenon of Ogori (Treating) from Cultural Psychological Perspectives 共愛学園前橋国際大学論文集 第 5 号,73-88.
- 片成男 2002 援助規範逸脱をめぐる相互作用からみる道徳性とその発達 神戸大学博士論文(未公開)

- 片成男・山本登志哉 2001 子どものお小遣いと親子関係：親との面接調査から（平成 10 - 12 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)(海外)）研究成果報告書“文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較”），104 - 116
- 竹尾和子・片成男・高橋登・サトウタツヤ・山本登志哉・呉宣児・金順子・崔順子 2004 お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友だち関係 大阪調査から 発達研究，18，1 13.
- Triandis,H.C. 1995 *Individualism and collectivism*. Boulder : Westview Press.
- 山本登志哉 1992 小学生とお小遣い - お金・物霊・僕のもの 「発達」51，68 - 76 ミネルヴァ書房
- 山本登志哉，片成男 1999 中国朝鮮族中高生のお小遣い 第 10 回日本発達心理学会大会発表論文集 212
- 山本登志哉・片成男 2000 文化としてのお小遣い - または正しい魔法使いの育て方について 日本家政学会誌 51，12，1169-1174
- 山本登志哉・片成男，2001 お小遣いを通して見た子どもの生活世界と対人関係構造の民族地域比較研究（平成 10 - 12 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)(海外)）研究成果報告書「文化特異的養育行動と子どもの感情制御行動の発達：その日中比較”），79 - 103
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・呉宣児・金順子 2002a 子どもとお金：韓国濟州島で子どもと大人に聞く（自主シンポジウム）第 44 回日本教育心理学会総会発表論文集 Pp . S74 .
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・呉宣児・金順子・崔順子・片成男 2002b 子どもとお金：子どものお小遣いの使い方 韓国濟州島の調査から 第 44 回日本教育心理学会総会発表論文集 Pp29 .
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・片成男・呉宣児・金順子・崔順子 2003 お金をめぐる子どもの生活世界に関する比較文化的研究：濟州島調査報告， 共愛学園前橋国際大学論集，3，13-28

<謝 辞>

調査にあたってご協力いただきました児童，生徒の皆さん，仲介の労をお執りいただいた尹智媛先生ならびに，各学校の校長先生，校監先生，担任の先生方に厚く御礼申し上げます。また，本論文執筆にあたり貴重なご助言を賜りました清泉女学院大学の東洋教授に心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は共愛学園前橋国際大学共同研究費，および，2003～2006 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1）（海外））（研究課題名：「お金をめぐる子どもの生活世界の日中韓越比較研究：儒教文化圏の多様性と文化変容」，研究代表者：山本登志哉 共愛学園前橋国際大学）を受けて行われた。

お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友だち関係

